

第 63 回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

東京学芸大学附属小金井中学校校 3 年

笠井 凜心

課題①

本年は SDGs の中間年。2030 年までに 17 の国際目標から成る SDGs を全て達成するために、日本ができることは何か。

副題

優しさを創り出す

老若男女、日本人外国人を問わず、気兼ねなく集まれる居場所をご存知だろうか。そう、子ども食堂だ。私は小学高学年の時から妹と訪れ、今では大好きな場所の一つになっている。そんな私は断言したい。子ども食堂は間違いなく日本、いや世界をも救うカギになる。

準備が始まるのは当日の二週間前。SNS で開催を呼びかけると応援の言葉や子どもたちに遊んでほしいというまだまだ使えるおさがりのおもちゃが届く。数日前には農家で採れすぎた野菜やスーパーでロスになるはずだった食べ物も集まる。そして当日、いただきますの前にどうしてご飯が食べられるのか、どんな繋がりを経てここに辿り着いたのか紹介することを忘れない。男の子が一言、「みんなやさしいだね!」

私はやっと腑に落ちた。これが子ども食堂を表す言葉なのだと。人と人が誰か、いつかのために力を合わせ、足りなければ補い合う。その優しさが誰かの笑顔を生む。笑い合いながら、たくさんの優しさが詰まっていると分かっていたく食事は何よりもおいしい。そして、それに気がついた自分も優しさの輪に加わりたいと思うようになる。

お手伝いを通して気になり始めたのは、子ども食堂には貧困対策というイメージが残っていることだ。もちろん、社会的福祉の役割も持ち合わせているが、イメージが原因で行くことをためらっている人がいたらとても残念。そう考えて特に来ることが少ない中高生に向けて、優しさで繋がる誰もが学べる居場所として新たに知ってもらいイベントを企画した。運営する人や支援団体のむすびえの協力で十回以上の打ち合わせの末に開催でき、定員の三十名が参加してくれた。二週間経って同い年の女の子が、「いつも一人で食べていたけど子ども食堂に行ったら世界が広がった。きっかけをありがとう。」とメールで伝えてくれたときは素直に嬉しかった。私は世界を変えられる、と信じられた。

なぜこんなに優しさが大切なのだろう。私は「受け入れる」ために必要な力だからだと答えたい。例えば学校や会社が中心の生活では、自分と違う属性とのいわば縦の繋がりとは自然と少なくなる。似たもの同士は居心地が良いから、新しい局面になったとき無意識に壁を作ってしまうこともあるだろう。子ども食堂に行くと一緒に過ごすことが当たり前になって他の場面でも慣れやすくなる。

対象が人でなく、他の生き物や新しい取り組みでも良い。地球に住む一人の哺乳類として自分を捉えたと守っていく者として、ムダ使いしないように他者を考えられるようになるのではないかな。これ

は SDGs の十七番目、「パートナーシップで目標を達成しよう」に関わってくると私は思う。個人がジェンダー平等や経済成長といった目標を達成するのはかなり難しい。けれどパートナーシップ、私なりに訳すと優しさを持って生きることは誰にでも可能なことではないだろうか。

よく知らないもの・ことに会おうと少し怖いかもしれない。それでも自分から一歩踏み出して、知ろうとしなければその壁はこれからも乗り越えられないだろう。お互い様、いただきますのように私たちの祖先は優しさと感謝にあふれた言葉を使い続けてきた。大切に、考えてほしいというメッセージではないか。明日、いつもの道でごみを集めるあの人に一言、

「いつも見えています、ありがとうございます!」

そこから芽生えた優しさで、あなたのいる世界は違って見えるかもしれない。

個々の先、国と国とを優しさで繋げていくのは国連の仕事だ。先進国、発展途上国のように線を引くのではなく、子ども食堂のように立場に関係なく助け合える仲介地点であってほしい。そしていつか、加盟国全ての代表者が笑顔になる、そんな瞬間を見たい。